

# 恋愛的自己にみる感情と近代

—Eva Illouzの議論をめぐって—

久保田 裕 之

## 1 はじめに：感情と近代

楽しい時には笑い、悲しい時には涙し、腹立たしい時には怒りが込み上げてくる。こうした人間の様々な感情は、長らく心理学の対象ではあっても、制度や規範を扱う社会学の領分ではないと考えられてきた。現代でも、社会学はせいぜい、感情を表現する適切な場面と不適切な場面を画する制度や生活領域の分析を通じて、内から湧き上がる感情を「統制」したり「馴致」したりする場면을説明するのに役に立つ程度だと、認識されているかもしれない。

これに対して、より深いレベルで感情が社会と関わっている可能性を示し掘り下げようとしたのが、感情社会学と呼ばれる分野である。具体的には、感情社会学の日本への導入は、1980年代から岡原正幸（1987；1994；1998）によって、また、1990年代に山田昌弘（1994）らを通じたA・ホックシールドの紹介によって、その後2000年代には崎山治男（2005）らによる感情社会学批判の中で、中心的に行われてきた。

とはいえ、感情社会学は今なお社会学のメインストリームにあるとはいえない。やはり感情は、経済や政治、宗教、自己を扱う大文字の社会学に対して、一段周縁的なもの、少なくとも扱いにくいものと思われるようである。そこで本稿では、現代の感情社会学の旗手であるエヴァ・イルーズ（Eva Illouz 1961～）<sup>1)</sup>による感情資本論と恋愛的自己論を近代化論の観点から紹介するとともに、そこから現代における感情的生活の焦点でもある恋愛・結婚・家族を巡る日本の状況への示唆を引き出したい。

## 2 社会学における感情の位置付け

### 2.1 合理化されざる感情：社会史・心性史研究のインパクト

社会学において、感情の位置づけは当初より周辺的なものであった。た

たとえば、M・ウェーバーの行為の4類型において、目的合理的行為、価値合理的行為、伝統的行為と並んで類型化された感情的行為は「無思慮な反応」か「意識的な発散」に過ぎないものという残余的な位置づけが与えられ、いわば主意主義的行為論の中では対象化可能な境界線上に置かれていた(Weber 1921 = 1987)<sup>2)</sup>。時代を下っても、T・パーソンズは感情性に対する感情中立性を専門職に割り振っただけでなく、ベイルズとの共著の中で、サブシステムとしての家族における愛情を近代化に伴う機能分化の中で家族の中に専門特化されたものとしての愛情を描いている(Parsons 1955 = 2001)。

これに対して、1970年代以降、アナル学派を中心とした社会史・心性史研究は、私的生活の歴史的変遷を検討する中で、家族の中で普遍性を与えられてきた愛情の歴史性を主張することになる。たとえば、Ph・アリエス(Ariès 1960 = 1980)は『〈子供〉の誕生』の中で家庭の中で愛情を注がれる子ども期の歴史性を論じ、E・バダンテール(Badinter 1980 = 1991)は、母性愛がルソーの教育書を通じて歴史的・社会的に付け加えられた(en plus)神話であることを主張したほか、E・ショーター(Shorter 1975 = 1987)は『近代家族の形成』の中で、夫婦愛・母性愛・家族愛からなる感情革命が近代の到来と深くかかわったことを論じている。

## 2.2 感情社会学から感情資本論へ：ホックシールドへの批判と継承

これに対して、感情そのものの社会的条件を初めて社会学的な分析の中心に据え、その後の感情社会学の展開に大きな影響を与えたとされるのは、A・ホックシールドの著書『管理される心』(1983 = 2000)である。ここで感情社会学とは、「人間にとって最も普遍的な自然現象と考えられてきた『感情』について、その社会的な構成原理や文化相対的な管理規則を問う営み」であり、「そこには、他者と同じ感情を抱けずに悩む者(感情逸脱者)や感情管理に従事する者(感情労働者)を解放する契機が見出され、また科学的合理性や客観性に偏重した社会学にパラダイム転換をもたらす期待」をもって迎えられたという(澤井 2013 : 41)。

しかし、その後の感情社会学に対する批判の中で、感情社会学はその不徹底さが問題化され、当初の感情社会学への期待は十分に叶わぬままであったという。たとえば、主に現象学的社会学の視点からの「生きられる感情」を扱えていないという批判や、感情の唯一性をないがしろにすると

いう批判(澤井 2013:41)、あるいは、感情が社会からラベリングされる過程のみを扱うことで、『『本当の感情』を実体的に想定し、それが抑圧されるという図式によって成立している(崎山 2005:50)』といった批判が投げかけられる。こうしたホックシールドのマルクス主義的な素朴疎外論の問題点については概ね同意するものであるが、その結果、感情社会学の方法自体が反省的に批判される中で、「感情そのもの」の探求へと舵を切っていくことになる。

これに対して、感情を再び近代化論と強く結びつけたのが、本稿で取り上げるE・イルーズである。具体的には、イルーズは『消費される恋愛的ユートピア (Consuming Romantic Utopia)』(2007:未邦訳)において消費社会と恋愛的空想の関係を論じたあと、その初期の論考『冷たい親密性 (Cold Intimacies: 未邦訳)』(2007)で「感情資本主義」論を大きく展開したことで高く評価されることになる。たとえば、イルーズは『冷たい親密性』の冒頭で、古典的な社会学理論は、注目されていないだけで、実は当初から感情を近代にとって重要なものとして扱ってきたという大胆な解釈を提示している。少し長いが、訳出しておこう。

伝統的に社会学者は、資本主義の到来、民主的政治制度の勃興、あるいは、個人主義の観念が持つ道徳的力といった観点から、近代を描いてきた。しかし、剰余価値、搾取、合理化、脱呪術化、分業といったよく知られた概念と共に、近代に関する殆どの重要な社会学の説明は、控えめな形ではあるものの、もうひとつの物語を内包していたことについては、ほとんど注意が払われてこなかった。すなわち、近代の到来についての感情という観点からの記述ないし説明である。一見些末に見えるかもしれないが明白な例をいくつか挙げるならば、ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理は、経済的行為において感情が果たす役割の理論をその核心に内包していた。というのも、そうした感情は、資本家による必死の企業活動の核心にある不可知の神聖性が喚起する不安だったからである。たとえばまた、マルクスのいう疎外は、労働者が労働の過程および生産物との関係についての説明の中心をなすものである。マルクスが『経済学・哲学草稿』において、疎外された労働を現実感の欠如、彼の言葉でいえば、対象との絆の喪失として議論したとき、そこには強力な感情的な含意をみることができ

る。マルクスの「疎外」が大衆文化によって収奪され歪曲された理由は、その大部分は疎外が持つ感情的含意ゆえであった。というのも、近代と資本主義が疎外をもたらすのは、それらが人々を互いに／共同体から／自らの自己の深部から分離させるような感情的麻痺を作り出すためである。たとえばまた、ジンメルの有名なメトロポリスの描写を取り上げるならば、そこには感情的生活の説明が描かれている。ジンメルにとって、都市的生活は、神経への絶え間ない刺激の流れを作り出し、感情的関係に根差した町的生活と対置されるものであった。ジンメルにとって、典型的な近代的態度は、無関心 (blasé) な態度であり、遠慮と冷淡さと無関心がないまぜになったものであった。ジンメルが付け加えるには、それはつねに憎悪に転じる危険を孕んでいた。最後に、デュルケムの社会学は、最も明瞭に感情と関わっており、彼が新カント派であったことを考えればおそらく驚くべきことである、デュルケム社会学の急所である「連帯」は、まさに社会的行為者を社会の中心的な象徴 (『宗教的生活の原初形態』でデュルケムが「沸騰 effervescence」と呼んだもの) の下に束ねる感情の束以外の何物でもない。(『象徴的分類』の結論部において、デュルケムとモースは、ずば抜けて高度な認知の在り方である象徴的分類は、感情を核とする主張している。) デュルケムの近代観は、より直接に感情と関連している。このことは、もし近代社会における社会的差異化が感情的な強さを欠くならば、近代社会がいかにして「ひとつにまとまっていられるか」を解明しようとしたことにも表れている (Illouz 2007 : 1-2).

その後、『近代における心の救済 (Saving the Modern Soul)』(2008 : 未邦訳) で精神分析やセルフヘルプ言説を検討したあと、以上の議論を現代における恋愛の苦痛の社会的構成の分析という軸に沿ってまとめたのが、本稿で取り上げる『なぜ愛は辛く苦しいのか (Why Love Hurts)』(2012 : 未邦訳) と、その続編ともいえる『愛の終わり (the End of Love)』(2021 : 未邦訳) である。一連の著作を通じて、近代の高度化に伴う資本主義による感情を取り巻く社会的条件の変化、とりわけ資本主義による社会の合理化に伴う感情性の変化を、何よりもフェミニズムの視点から現代を生きる女性の支配や搾取と関連させて分析するというイルーズのアプローチは、「感情そのもの」の探求を指向した研究というよりは、むしろホックシー

ルドの問題意識に立ち返るものとしても評価できる（それゆえホックシールドへの批判も一定程度当てはまる）。ここで、感情資本主義とは、「経済的な言説や実践と感情の言説や実践が相互に影響して形づくられ、そのため、一方では感情が経済的行為の不可欠な要素になり、他方で、とりわけ中間層の感情生活が経済的関係の論理や交換過程に服従するような文化」（Illouz 2007：5 ※岡原訳（2013：75）より転載）と定義される。

しかし、日本の社会学におけるイルーズの受容、およびイルーズに関する研究に限ると、千葉和矢による書評（2011）を除き中心的なものではなく、分析のための理論枠組みとして大きく取り上げているのは、労働社会学の分野でハラスメントを取り巻く現代的状況についての著書で用いている山田陽子（2007；2019）を除くと、論考・記事などで断片的に言及される程度である。現状、周辺領域では、ニコラス・ローズ（Rose 1999 = 2016）らと併せて新しい自己論の研究者として扱われていると思われる。なお、2021年現在、イルーズの邦訳は刊行されていない<sup>3)</sup>。

### 3 E・イルーズ『Why Love Hurts』の概要

そこで以下では、イルーズの主著である『なぜ愛は辛く苦しいのか（Why love hurts）』の概要と議論の構造を紹介する。まずは、章ごとの概要を簡潔に示したうえで、その後、終章における著者による要約を一部訳出する形でキーワードを解説していくという方法を取る。そのうえで、次節で本書の意義と課題を抽出することにしたい。なお、イルーズによれば、2～3章は恋愛的意思の脱構築として、4～6章を恋愛的欲望の脱構築として位置づけられている。

#### 3.1 全体の要約と各章の役割

序章では、恋愛小説や恋愛に関する映画やTVプログラムが扱うように、恋の不成功や恋愛それ自体に起因する苦痛や痛みは、多くの人々がそれを集合的なものとして認識しているにもかかわらず、心理学的な問題であり社会的な問題ではないと考えられがちなことを批判し、社会的な研究の必要性を訴えている。というのも、心理学とりわけ臨床心理学や精神分析による恋愛的苦痛の説明は、セラピーや自己啓発を通じてその原因を自己の未熟さや幼少期の経験に還元してしまう点で問題があるからである。イルーズは次のように論じている。

まさに私たちが、個人責任が最上位に君臨する時代を生きているがゆえに、社会学の使命は依然として不可欠なものである。一九世紀の終わりには、貧困が道徳性の欠如や性格の弱さではなく、体系的な経済的搾取に起因するものであると主張するのは、急進的(ラディカル)なことであった。これと同じように、現在、私たちの私生活における失敗が精神の弱さのためだと主張するのではなく、むしろ、私たちの感情的な生活の見通しの悪さと不幸は、現代の制度配置によって形作られているためだと主張することが急務なのである(Illouz 2012: 9)

別の個所でもイルーズは、「実際、恋愛関係の困難を説明し正統化する様式としての生物学と心理学は、問題の答えではなく、問題の一部なのである」(Illouz 2012: 245)と批判している。具体的には、1) 近代に対する社会学のスタンスを明確にし、近代の一側面を解明するために恋愛という素材が最適なもののひとつであること、2) 近代における恋愛の痛みの解明に社会学が不可欠であることなどを主張したあとで、3) 本書で恋愛的苦痛を扱うパースペクティブの整理と、本書で用いられる実証的な方法論についての説明が示されている。また、本書の目的として、イルーズは「究極的な私の目的は、マルクスが商品に対して行ったことを、愛について行うことである」と簡潔に述べている(Illouz 2012: 6)。

第2章では、前近代と近代の配偶者選択を比較するなかで、恋愛的選択の「環境(ecology)」と「設計(architecture)」がどのように変化したのかを論じている。ここで選択の環境とは「選択を特定の方向に引っ張る社会環境に関するもの」として、たとえば、同じ家族の成員や異なる人種・エスニック集団の成員を潜在的な配偶者から除外する外婚規則などを挙げている(Illouz 2012: 19)。他方で、選択の設計とは「主体にとって内的な、文化によって形作られるメカニズム」すなわち「人が対象(芸術作品、歯磨き粉、配偶者候補の望ましさ)を評価する基準と、人が決定に際して自らの感情、知識、公的理由付けに問いかける自問の様式との、双方が関わっている。選択の設計は、多くの認知的・感情的な過程からなるが、とりわけ何より、決定に際して感情的で伝統的な思考の形式を査定し、想像し、監視することにかかわっている。ある選択は、複数の選択肢を前に念入りな自問の末に導かれた結論かもしれないし、「瞬間的な」その場の判断かもしれない」ものである(Illouz 2012: 20)。具体的には、1) J・オー



スティンをはじめとする19世紀の文学作品から前近代の配偶者選択の特徴を抽出する中で、配偶者選択が、階層に規定された品性を軸に／個人ではなく社会の網の目の中で行われ／儀礼や振る舞いを通じて進行する遂行的な感情を伴う／経済的利害と直接結びついたものであり／世評を通じて約束が守られることが重視されていたため／当然に献身的なものであったのに対して、2) 近代において生じた恋愛的選択の変容は、K・ポランニーが土地・労働力・貨幣の(疑似的な)商品化が資本主義市場を誕生させたように、恋愛的選択の構造の脱埋め込みによって結婚市場を誕生させる「大転換」であった。すなわち、3) 階層構造から配偶者選択が切り離されることで恋愛的選択が性化・心理学化されたこと、階層・国籍・人種などの制約から自由な結婚市場と、個人的嗜好や性的魅力をもとに男女が競合する象徴闘争の場としての性的界が誕生したこと、などである。こうした新たな恋愛的選択は、資本主義における文化産業と強く結びつき、新しい女性の抑圧と感情的不平等を作り出しているという。

第3章では、主に現代の男性の特徴として位置づけられる「献身恐怖症(commitment-phobia)」が、どのような恋愛的選択の設計から導かれ、何を帰結するのかについて論じている。ここで献身恐怖症とは、男性が女性に比べて結婚子育てその他の長期的で献身的な関係からより多くの利益を得るにも関わらず、そうした関係に参入したがるならないという現象を指している。具体的には、1) 近代を特徴づける自由のなかでも、性的自由がもたらした影響として「献身恐怖症」を取り上げる背景を説明したあとで、2) 歴史的に男性よりも(理性が弱いために)性的・情熱的と考えられていたが、宮廷愛からビクトリア文化に至るなかで女性には謙抑と貞潔が／男性には制度化された情熱が特権化されたにもかかわらず、現代において情熱を失い長期的な関係を持ちたがらない男性が問題化されるようになったこと、3) しかし、こうした献身恐怖症を男性の未熟や生物学的特性に求めるのではなく、男性にとって性関係が社会的地位や権力と結びついてきたことを含むジェンダー差に着目して社会学的に説明がなされるべきこと、4) 具体的には、女性が早い段階で一人の男性と結婚を通じた排他的関係に入りたがるという女性の排他主義戦略は、生物学的というよりも一夫一妻的な制度的枠組みの中で、出産可能性／年齢による美の衰え／人口学的なによって制限時間の感覚が作り出されるのに対して、男性はこうした女性の戦略のお陰で性的界において有利な立場を享受すること、5) 性的相

手が希少ではなく潜在的に潤沢であることが、欲望や感情の性質を変化させることで、享楽型の献身恐怖症と、無為自閉型の献身恐怖症という二つのタイプの献身恐怖症をもたらしていること、6) インターネット技術に支えられた潤沢な性的機会に際して、選択への欲望や意思が弱体化させられ、未来に対して自らを束縛する約束がその価値を失っていくこと、7) 男性が男女関係を通じて男性からの承認を求める結果、多くの性関係を持つことが男性のみならず一部の女性の戦略にも採用され、男女の感情的不平等を作り出していることなどが論じられる。

第4章では、主に性的界において伝統的に女性によって採用されてきた「献身(コミットメント)指向」の分析を手掛かりに、存在論的安心の基盤となる社会的承認への要求が、近代における個人主義と政治的平等を通じて勃興した自律の要請に劣後してしまうことで生じる女性の自己の脆弱性を説明しようと試みている。具体的には、1) 愛すること／愛されることが持っていた自己価値を与える力を確認したうえで、2) こうした自己価値を支えていた旧来の階級による社会的承認が、恋愛的爱や欲望可能性を通じた新しい相互承認へと形を変えたこと、3) しかし、他者からの愛情や欲望によって支えられる新たな相互承認の様式は、前近代における恋愛的苦痛とは全く異なる存在論的不安を掻き立てることになったこと、4) とりわけ、近代における相互承認は、恋愛関係においても自律的に扱い／扱われるべきという自律性の価値と競合し、自律が優先されることで承認が困難になる結果、5) たとえば婚約破棄に明確な社会的非難と制裁が伴っていた前近代とは異なり、近代では恋愛の破綻が「そんな相手を好きになってしまう自分(特に女性)」への自己非難を誘発する構造と、6) それに加担してきた心理学的言説の問題性について指摘している。本章は、欲望の脱構築の第一の局面として位置づけられている。

第5章では、欲望の脱構築の第二の局面として、愛の「脱呪術化」が進行してきた過程について分析を展開している<sup>4)</sup>。すなわち、ウェーバーの脱呪術化論を拡張しながら、神秘的で説明不可能な呪術的なものとして観念されていた愛は、近代化によって「理性的啓蒙と科学」「フェミニズムと女性解放」「インターネットによる高度な選択技術」という三つの文化的諸力によって脱呪術化され、その中で平等規範と不確実性に対処しようとする結果として愛に対する冷笑的な態度を帰結することで、強い恋愛的爱欲と情熱がその基盤を失っている過程を描いている。具体的には、



1) ウェーバーの「脱呪術化」から反射的に「呪術化された愛」を神聖性／説明不可能性／経験超越性／主客一体性／唯一的共認不可能性／利己超越性から定義したうえで、2) 精神分析、心理学、神経科学、進化生物学に代表される近代科学と理性による主知化が、愛から呪術性をはぎ取ったこと、3) フェミニズムによる政治的な男女平等化と手続き主義化の圧力によって、カップル間の貢献や感情について「均衡原理」を呼び込み、性関係を相互の同意と互酬的な関係であることを求める詮索と統制の中に組み入れたこと、4) インターネットに代表される情報技術の進展によって、性的・恋愛的出会いが主知化／合理化／可視化／共約化／競争化／効用最大化し、恋愛的欲望と恋愛的信念の聖地を大きく変容させたこと、5) こうした一連の愛の合理化・脱呪術化過程を通じて、ジェンダー化された厚い意味の差異／断続／蕩尽／自己放棄／曖昧さや確実性と結びつけられてきた愛は、恋愛的欲望や意味を生み出す文化的な力を失ってしまったことなどである。

第6章では、欲望の脱構築の第三の局面として、恋愛的欲望にとって想像・空想が果たす役割の重要性とその変化、とりわけ、近代において小説、映画、インターネットと発展してきた文化的技術を通じた虚構的想像とそれによって喚起される虚構的感情が私たちの社会化過程で重要な役割を果たすようになるにつれて、想像と日常生活のギャップによって生み出される幻滅が私たちの欲望する能力の基礎を奪っているという認識が示されている。ここでイルーズは、C・キャンベル (Campbell 1989) の議論を引きながら、以下のように「恋愛的自己 (romantic self)」と消費文化の密接なつながりを主張している。

この章の冒頭で引用したアドルノが示唆するように、想像は商品化されたブルジョワ文化によって馴致されると同時に常に掻き立てられている。コリン・キャンベルらが主張するように、消費は、自分とは何者かという問いへと個人を接続する夢想と空想によって駆動されている。その著書『恋愛的倫理と近代的消費主義の精神 (未邦訳)』のなかで、キャンベルは消費文化が恋愛的自己をその中心に据えるようになったと議論している。ここで恋愛的自己とは、感情と想像と夢を刺激する真正なものへの感情と切望によって満たされた自己のことである (Illouz 2012 : 208)。

具体的には、映画やドラマなどの筋書きを参照して予期された感情が現実の恋愛の中で幻滅を生み出す場面についてのインタビューなどをもとに、1) 夢が通常の愛の認知的・感情的活動としてますます規約化され駆動されていること、2) 想像から日常的存在への切り替えと移行が妨害されることで、日常生活および親密性の構造と幻滅とが接続され、結果として幻滅を生み出していること、3) 分厚い情報技術によって想像と欲望が合理化されていること、4) 欲望と想像の累進的な自律化、すなわち、欲望と空想が特定の目的や対象を失いそれ自体が自己目的化していることなどを論じている。

終章では、本書の議論に対して予想されるいくつかの疑問や反論に答えるとともに、ここまでの愛の苦痛と恋愛的自己の近代的苦境についての議論を振り返り、本書が含意する具体的な戦略について整理している。具体的には、まず、ビクトリア期の愛の方がましだったという誤解や、女性に比べて男性は苦しんでいないという誤解、愛の不幸一般が近代に成立したものであるという誤解への回答と注意喚起し、次に、本書で議論してきた重要な語句を中心とした議論の振り返り、そのうえで、本書での議論を踏まえ、イルーズが考えるフェミニズムとカント主義的倫理学が採用すべき戦略と、近代の条件付き承認の意味について触れて、本書を閉じている。とりわけ中段では、本書の議論の構成を、いくつかの重要なキーワードを用いて振り返ることで整理している。具体的には、「選択の環境と設計の変容」「性的界の誕生」「承認の新たな様式」「欲望の冷却と意思の弱体化」の順で説明されている。以下では、やや長いが著者による要約を訳出する形で全体像を確認していく。

### 3.2 本書の4つのキーワードの解説と議論の展開

まず、本書が中心的な分析の対象としたのは、近代における配偶者選択／恋愛的選択の構造の変容であり、具体的には「選択の環境」と「選択の設計」という二つのレベルで生じた「愛の大転換」である。

- ①「**選択の環境**」と「**選択の設計**」の変容：規範的（性革命）・社会的（階層、人種、民族的同類婚の衰退）・技術的（インターネット技術と出会いサイトの誕生）な変化に伴い、配偶者の探索と選択は大きく変化した。「愛の大転換」という考えは、前近代と現代の選択の社

会的組織化がいかに異なるかを大掴みするための分析的道具である。一般に信じられているのは異なり、近代における選択は認知的かつ再帰的なものであるが、そうした特徴はとりわけ愛の対象を探し見いだす過程にみられると私は主張した。こうした特徴は、「選択の環境」の変容の結果であり、以下のいくつかの要素によって示すことができる。すなわち、1) 選択可能な相手の範囲が著しく拡大した結果として可能性の感覚が無限に広がったこと、2) 選択を確定するまでの過程がより長くより複雑になったこと、3) 性・身体・文化といった多様な領域における嗜好がますます動員され洗練されたこと、4) 他者を評価する過程がより認知化・個人化されたこと、そして、5) 自らの選択を改善する機会の認知が関係の中に構造的に埋め込まれたこと、などである。これらはすべて、それをより合理的かつより感情的なものとして、より嗜好と緊密に結びついたものとして認識させることで、パートナー探索過程を変容させた。それゆえ、近代的愛の中心には新しい評価過程が存在している。すなわち、認知可能で固定的な感情が行為の道標となるように、自己は存在論的感情に依存しているのである。その結果、多元的な評価軸に沿って人を評価することを複雑で精巧なものになる。こうした変化は、人々の欲望と意思の性質が変容するための条件を準備する。すなわち、人々が約束し、将来を予期し、自らの過去を顧みて決定し、リスクを考慮して評価し、そして最も重要なことに、人を愛するとき何を感じ望み意図するのかについての意思と欲望の性質の変容である (Illouz 2012: 241-2)。

その意味で、本書はK・ポランニーが土地・労働力・貨幣について行った分析を、恋愛について行ったものだということができる。イルーズによれば、こうした「愛の大転換」によって「性的界」と呼ばれるものが誕生した。性的界は、男女を共に巻き込むものだが、とりわけ男性の女性に対する「感情的支配」と、その結果「感情的不平等」を作り出すものとして機能する。

②「性的界」の誕生：性的界は、セクシュアリティがパートナー選択の自律的側面へと転じる社会的闘技場であり、緊密に商品化された社会生活の闘技場であり、評価の自律的基準である。性的界において

は、そこに参加する行為者が絶え間なく他者を評価する作業に従事し、多くの他者と競合していること、こうした競争状態において他者を評価していることを知っている。性的界において、行為者は互いに競争するが、それは、1) 性的に最も望ましいパートナーをめぐり、2) 夥しい候補者の中から、3) 自らの性的魅力と性的力量を示すことを通じて行うのである。結婚市場は、こうした競争的な諸側面を含むものの、たとえば社会経済的地位、人格、文化レベルといった他の側面も同時に含むものである。結婚市場においては、経済的地位や身体的魅力、教養、収入そして、人格や「セクシーさ」「かわいさ」といったより曖昧な特徴に従っても選択される。結婚が市場であるというのは、自然ではなく歴史的な事実であり、「選択の環境」の変容によって生じたものである。歴史をさかのぼっても、異なる社会階層・宗教・人種に属する男女が、自由な市場において無制約に出会うことはなかったし、美しさやセクシーさ、社会階級といった特質が合理的かつ道具的に評価され交換されることはなかった。結婚市場は、常に性的界と併存している。しかし、性的界はしばしば結婚市場に先行し、それゆえ結婚市場を侵犯する。たとえば、性的界に滞留し、結婚市場よりも好ましく思う男女もいる。こうした意味での性的界は、男性の方が性的界に長く留まり、女性の幅広い選択肢を持つために、男性によって支配されている。(とりわけ上中産階級の)男性による性的界の支配を可能にしているのは、この選択の幅であり、はるかに男性の方が長期的な絆へと参入したがりない傾向からも明白である。性的界の力学と、新たな選択の環境と設計は、男性による女性の感情的支配の条件を作り出し、主に3つの点で男性に有利な立場を与えてきた。1) 現代において男性の社会的地位は、彼らが家庭や子供を持っていることよりも、彼らの経済的達成により大きく依存する点、2) 男性は生殖によって生物学的・文化的に定義されるわけではなく、それゆえ、女性に比べて男性はよりはるかに長い時間的な枠組みで探索を続けることができる点、3) 男性は性関係 [の豊富さ] を地位として用いることができるために、セクシーさの規範が若さにボーナスを上積みするために、年齢差別が男性に有利な立場を与えるために、選択可能な潜在的パートナーの幅は女性に比べて男性の方がはるかに広くなる。それゆえ、中産階級に属する異性愛男女は、性的界にそれぞれ

異なった形で参入することになる。男性の経済的成功が結婚よりも市場により直接依存するために、また男性は恋愛的承認への命法に（より緩くしか）拘束されず、性関係〔の豊富さ〕を地位として用い自律性を示すために、感情から切り離された累積的な性関係（セクシュアリティ）を持つ傾向にある。対照的に女性は、愛着と無関心の矛盾した戦略のなかに囚われる。それゆえ、男性の感情的切断と献身恐怖症は、新たな選択の環境によって作られた、性的界に彼らが占める位置の表現なのである（Illouz 2012: 242-3）。

その意味で、本書はブルデューの「象徴資本」をめぐる「界（champ）」概念を、結婚、恋愛、性の市場的領域に適用することで、なぜ性の自由化によってとりわけ女性が苦境に立たされるのかを市場メカニズムとその市場を成り立たせる社会的基礎から検討するものであるともいえるだろう。こうして誕生した新たな闘技場において経済・社会的な価値や地位、自尊感情が付与される結果、人々に価値とアイデンティティをもたらす社会的承認の構造もまた大きく変容を迫られることになる。

③**新たな承認の様式**：新たな〔選択の〕環境に起因する不平等は、まさに新たな承認の様式をめぐって展開する。あらゆる社会的界と同様に、成功は地位と自尊を発生させる。魅力と性的資本は、今や社会的価値を示す標であると同時に、社会的価値自体を作り出すために用いられており、それゆえ承認の中心的な過程となっている。逆に、こうした界で結果を残せないことは、自らの価値とアイデンティティを脅かすことになる。したがって、愛は道徳的不平等、すなわち自尊の感覚における不平等の力学の一側面へと転じたことによる不平等は、男性が界を支配することによって男女を分断し、それ以上に、男女問わず結果を残せない者との間を分断する。言い換えると、不平等は両性間に存在すると同時に、両性内にも存在している。さらに、女性のアイデンティティを形作るとともに女性を公的世界から切り離す私的領域という近代特有の体制によって、愛が女性にとっての自尊の社会的意味の中心を占めるようになる。それゆえ、自由市場の条件下では、女性は自らを確証するためにより多くの愛を必要とすると同時に、より強くより早く献身したがることになる。選択の環境と設計の変容

と、愛と社会的価値の結合によって、今や社会的というよりもむしろ感情的な不平等をめぐってジェンダー不平等が作動することを示している。人口に膾炙した火星人と金星人の物語〔※ジョン・グレイの恋愛指南書〕は、実際には、愛を巡って女性に価値を男性に性的資本をもたらすジェンダー差の承認という社会学的な過程を、心理学的用語で理解しようとする試みに過ぎないのである (Illouz 2012: 243-4)。

こうした承認の構造の変化によって、現代の恋愛をめぐる様々な社会問題のいくつかとその構造を説明することが可能になる。具体的には、自己の安定性が根本から脅かされ、欲望することや情熱を持つこと自体が難しくなり、自律性さえも危険にさらされることになるのである。

④**欲望の冷却と意思の弱体化**：冷笑、献身恐怖症、優柔不断、幻滅は（みな本書の中心的なテーマであり同時に愛の経験の中心的な特徴である）、私がここで意思と欲望の脱構築と呼ぶ4つの主要な構成要素であるが、その方向性は固い絆の生成から個性性の冷却へと変化している。これら4つの構成要素は、共通してある種の困難を表現したものであり、それは1) 自己の完全性を調達することの困難、2) 他者を欲望することの困難、3) 主観性の最深部にある自己の自律性を肯定することの困難、そして、4) より一般的な情熱の冷却の困難と関わっている。実際、変化したのは、欲望を駆動する能力であり、愛の対象を定める能力であり、愛の文化を自ら引き受ける能力である。まさに欲望が、その緊密性とそれが自己に由来する仕方を変化させたのである。第一に、広大な選択の幅に直面して、欲望は高度に認知化された内省と自己詮索の形式に頼るようになる。第二に、様々な選択の可能性を比較することは、強い感情を削ぐことになる。第三に、欲望は今や、手続き主義に支配された文化的環境のなかで生じるものになっている。すなわち、欲望は、他者との関係と自らの感情的生活をおくるための抽象的で形式的な規則に従って生じることになる。第四に、前近代的な欲望が希少性の経済によって支配されていた一方で、現代の欲望は性的自由の規範と性的商品化によってもたらされた潤沢の経済によって支配されている。最後に、欲望が想像の領域に進出したことにより、現実の相互行為に踏みとどまって欲望を維持する可能



性が脅かされている。この意味で、欲望は強くなったと同時に弱くなったともいえる。すなわち、一方で欲望は意思という後ろ盾を失った点で（選択は意思を鼓舞するよりは萎えさせる）弱くなったものの、他方で欲望は代償的な領域における仮想的で代償的な関係へと場を移した点で強くなったともいえるのである（Illouz 2012: 244）。

最後に終章の後段では、イルーズが含意する恋愛をめぐる社会問題の展望、すなわち、イルーズが本書を通じて描いてきた、愛の苦悶についての心理学や生物学による本質主義的な説明に替えて、社会学的な説明を対置することの重要性を通じて、社会変革の淡い可能性を論じている。具体的には、情熱的な感情とそれを経験する能力がそれ自体としては人間と社会関係にとって必要不可欠なものであり、現代の相互行為における不確実性と不安を取り払うために有用なものであること、性的自由と自律を称揚することで新しい不平等の一端を担ってきたフェミニズムが感情的不平等に目を向けるべきこと、それゆえ、愛の不成就が自己の社会的基盤を脅かすようになったにもかかわらず愛と恋愛感情の冷却が生じている現状に対して何らかの形で倫理性を取り戻すべきことなどを主張している。たとえば、イルーズはフェミニストとしての立場を明確に押し出しながら、次のように書いている。

新しい愛のモデルを、それも、男性性と情熱的な献身が両立不可能でないどころか同義語とみなしうるような新しい愛のモデルを、私たちは再分節化する必要がある。男性を感情的不能のかどで非難するかわりに、性的資本に根差すのではない形の感情的男性性のモデルを呼び覚ます必要がある。実際、こうした文化的召喚は、女性の経験と矛盾しない倫理的感情的モデルを構築するというフェミニズムの悲願へと私たちを導いてくれるかもしれない。というのも、倫理的な振り舞いから切断されたために、私たちがここ30年間で理解する意味でのセクシュアリティは、とりわけ女性と多くの男性をも打ちのめし打ち捨ててきた弱肉強食の闘技場へと変えてしまったからである（Illouz 2012: 246）。

それが具体的にどのような倫理であるのか、ここでは十分に描かれている

わけではないが、たとえば経済領域が剥き出しの経済原理によって支配されるのではなく（それがどのようなものかは別として）一定の倫理的・社会的制約を受けるべきとされ、さもなければ私たちの社会的生が破壊されてしまうと社会学者が考える程度には、愛の領域もまた（それがどのようなものかは別として）一定の倫理的・社会的制約を受け入れるべきという点はさしあたり公正な議論であるように見える。というのも、仮に経済領域において社会学が果たすべき役割を愛の領域において果たすことが原理的に不可能であると考えらるならば、それは愛の領域を私たちの歴史と統制を超えた神秘的で前社会的な聖域として、再び議論の外に置くことになってしまうからである。

#### 4 批判：感情資本主義と日本社会への適用可能性

##### 4.1 本書の意義：近代と恋愛的自己、とりわけ女性に対する感情的支配と不平等

本書の社会的な意義は、以下の3点に大別することができるだろう。第一に、現代社会において、概ね心理学的な（ときに経済学的な現れを伴う）現象と思われがちな恋愛的愛 (romantic love) についての、最も詳細で最も分析的な社会的な議論であるという点である。もちろん、近代家族論以降少なくとも社会学者の間では、恋愛的愛がすぐれて近代的なものであり近代の諸条件とともに現状に至ったことが合意されているとしても、ときに社会学者の間でさえそれが本源的に生物学的・心理学的なものに大きく規定されていることが素朴に前提とされていることも少なくない。これに対して、本書の分析は、私たちが現在考える恋愛的愛の諸特性の大部分が、とりわけ前近代の恋愛を取り巻く状況との対比ですぐれて近代的なものであり、とりわけ後期近代における文化技術によって大きく変化してきたことに光を当てるものである。特に、欧米において一般の人々の語彙と世界観に深く組み込まれることになった心理学・精神医学の言説が、恋愛的愛の困難を説明し乗り越えるために役立つどころか、その苦境と困難の主要因の一つであることを指摘する部分は、恋愛に対する社会学的研究における社会的基底性を強く印象付けるものである。

第二に、近代の自己にとって恋愛的愛が持つ重要性と、恋愛的自己の安定が存在的安心に／恋愛的自己の危機が存在論的不安につながるメカニズ

ムを詳細に分析したという点で、自己論としての重要性がある。もちろん、近代が資本主義や政治的平等、合理性や科学技術といった諸要素によって特徴づけられるだけでなく、自律的な個人と近代的な自己によっても特徴づけられることは、これまでも議論されてきた。しかし、現代を生きる個人にとって、恋愛的愛によって与えられる資源と自尊が極めて重要となっていること、そして、恋愛の非成就によってもたらされる社会的な破滅的ダメージが正面から主題化されたことはなかった。この背後には、現代における恋愛的な痛みをどこか通文化的・普遍的なものとする想定があり、それゆえ文化技術の進展と関連した後期近代における恋愛的自己の深化と結びつけて議論してこなかったことに、気づかされる。

第三に、イルーズ自身フェミニストとして、愛と欲望の変容によってフェミニズムが果たしてきた功罪を両面から見据えうえて、なお現代における恋愛的苦痛の性差を描き出すという反省的思考の学術的な意義である。本書の中でも論じられているように、近代における恋愛と結婚の大きな変化の波に等しく飲み込まれながらも、男女は現代的な愛の構造の中で相当に異なる立ち位置を占めている。実際、本書の分析が、単に結婚市場や性的界の分析、愛の脱呪術化や恋愛と空想の関係性の分析にとどまるだけでなく、恋愛をめぐる近代的な変容が前近代とは別の形の女性支配（感情的支配）、別の形の男女の不平等（感情的不平等）を帰結していると斬り込む点は、フェミニスト視点のなせる業であり、本書の学術的意義と切り離すことはできない。こうした視点は、相対的に「経済的成功が結婚よりも市場に直接依存する」ことが多く、「女性ではなく他の男性からの承認を必要としている」男性研究者からは見えにくいものでもあったのかもしれない。同時にまた、第二波フェミニズムは男女の権力関係を問題化し政治的な平等な男女関係の礎となったことを評価しながらも、そうした平等志向が科学や文化技術と相まって男女関係の物語的・社会構築的側面を破壊し、欲望や情熱を困難にしたことで、翻って更なる恋愛の苦境をもたらした点を自省的に捉えている点も、本書が持つ反省的な価値である。ときに保守層から上がる「フェミニズムが／男女平等が、恋愛を難しくしたのだ」という俗説を部分的に受け止めながらも、平等そのものの問題ではなく、平等を取りまく社会構造と欲望を生み出すはずの文化的空隙の問題へと視点を広げる手腕は鮮やかである。

反面、本書の議論はその射程に関して、以下の二つの方法論上の課題が

挙げられるだろう。第一に、恋愛的愛やその苦痛の諸条件についての議論する際、前近代と近代の境界、近代のなかでも前期近代と後期近代の区別が、論証上曖昧にされている点である。とりわけ、2章から3章にかけて、J・オースティンをはじめとする19世紀の小説の中で描かれる恋愛と、21世紀とりわけインターネット時代の男女の恋愛に関するエッセイやインタビューと対置されているため、前近代と現代の対比が鮮明に描き出されているのは事実である。しかし逆に、本書が理論的には前近代から近代、その中で前期近代から後期近代へという二重の変容過程を射程に入れているにもかかわらず、前期近代については十分なデータを紹介できていないために、二重の変容過程を詳細に追うことができない構成になっている点は、控えめに言っても読者を混乱させる。

第二に、前近代における恋愛を取り巻く構造が、歴史的に小説などの資料や諸研究から類推するしかないとしても、現代の恋愛を取り巻く状況は様々なデータから異なる様相を伺うことができるため、形式的には扱う対象の代表性が問題となるはずである。この点、イルーズが取り上げるインタビューや、雑誌記事・エッセイなどについては、その抽出の方法や偏り、代表性についての説明が乏しいことは評価を難しくしている。少なくとも、どういう方法で集めたどういったタイプのインタビューなのか、その雑誌は読者の年齢・階層的にどのような位置づけなのかなど、実証性を担保するための手続きが不十分に見える。特に、一見してインタビュー対象者が高い職業階層に偏っており、年齢と居住地以外の情報がなかったことは、イルーズが一般化している状況が実際にはもう少し狭い範囲（都市居住、高学歴、高階層）に限られているかもしれないという疑念を呼ばずにはおかない。前近代を小説から読み解くならば、現代の状況も小説や映画を主として読み解いたうえで対比する方がシンプルであったようにも思える。もっとも、こうした点は「恋愛を取り巻くかかる状況が、明らかに身の回りに存在する」という社会的実感・合意の文化差から来るものかもしれない。

## 4.2 日本社会への適用可能性

では、以上の議論は、現代に日本にもどの程度当てはまると考えられ、また、どのような議論を引き出しうるだろうか。当然ながら、イルーズの議論は欧米を中心とした西洋社会を前提としたものであるが、周知のよう

な多様性はあるにせよ広義の近代という共通の課題に直面する日本にとっても、一定程度の妥当性を持っていることは疑いえない。すると一つの論点は、こうした議論が、人口学的に半圧縮された近代 (semi-compressed modernity: 落合 2015) と呼ばれる、家族規範を残したまま近代化した日本にどの程度当てはまり、どの程度特殊な形態をとっているか、あるいはどのような点で当てはまらないといえるのか、ということになる。

この点、日本における恋愛の特徴の一つは、それがあくまで結婚に従属し、結婚を目指して行われているという点に一つの特徴があるだろう。この点、谷本・渡邊が恋愛的爱 (ロマンティック・ラブ) イデオロギーを修正して恋愛結婚 (ロマンティック・マリッジ) イデオロギーと呼んだように (谷本・渡邊 2019)、結婚につながらない恋愛は自由化されたが、依然として結婚には恋愛が必要条件となっている状況がある。また、日本における法制度、とりわけ労働・社会保障に関する制度によって、女性の労働市場での活躍はいまだ制限が多く、社会保障は家族中心のものに固定化されているために、とりわけ女性にとって結婚が唯一でないにしても最も有力な生活保障である状況が続いている (山田 2019)。また、男性についても、社会的承認が結婚して親になることと結びつけられている以上、日本の男性は社会から一人前とみなされるために、依然として結婚を通じた献身を強く望んでいる側面があり、たとえばいわゆる「婚活」に苦しむ男性の姿 (高橋 2011) からは、日本には欧米ほど「献身恐怖症」が問題化されていないという見方もできる。

とすれば、日本社会における資本主義と結びついた恋愛・結婚・家族に関して、以下のような論点が提出できるだろう。1) 恋愛的选择の中でも、依然として経済的・法的保障を伴う結婚という王道が存在することが、日本における恋愛的苦痛をさらに特殊なものにしている可能性 (婚活など) はあるか、2) 結婚家族の中でも、煽られ続ける自己の恋愛の欲望が家族生活上の必要性によって挫かれることで、恋愛的自己の承認が掘り崩されている可能性 (不倫など) があるか、3) 恋愛関係の不安定さを代替する、相対的に対等で自由な友情／友人関係の日本における未成熟が、恋愛と資本主義の結びつき、とりわけ虚構の恋愛 (アニメ、マンガなど) を含む文化産業とどのように関連しているのか、といったものである<sup>5)</sup>。

### 4.3 結語：恋愛論から始める社会学

以上でみてきたように、イルーズの社会学の古典に対する大胆な援用と、哲学・経済学・心理学といった近接分野に対する造詣の深さと、SNSや恋愛小説コラムといった文芸的・現代的な素材を縦横に操る豪腕、そして何より、経済学や医学・進化生物学に対する批判的視座と、心理学に対する分析的とも敵対的ともいえる態度は、単に恋愛という個別のトピックに対する分析を超えて、「社会学の力」と「社会学の面白さ」そして、現代における「社会学の役割」とは何だったかをもう一度思い起こさせてくれる。

最後に、本書は社会学を学ぶ学部生（たとえば2年生）にとって、社会学を学び／社会学の可能性に触れるための最初の専門書としても役立つものと考えられる。第一に、もちろんすべての学生がそうではないが、恋愛や結婚という身近で比較的若年層の関心の高いテーマを扱うための最初の興味を惹きやすい点、第二に、ウェーバー、マルクス、デュルケムといった社会学の古典からブルデューやボルタンスキーに至る現代の重要な社会学との関連を意識しながら、時に大胆に理論を単純化して現代に当てはめて議論を進めている点、第三に、経済学・心理学・生物学と対比から（ときに明確な対決姿勢と社会学的分析の基底性を前面に出しながら）社会学の特異性と優位性を示しつつ論証を進めている点、第四に、これから本格的に後期近代的な恋愛・結婚市場へと足を踏み入れる大学生だからこそ恋愛と恋愛感情の社会学的分析に触れることで自らの今後10年の生き方に直接関係しているという点である<sup>6)</sup>。社会学的な知は、恋愛のみならず様々な領域で俗流の経済学的・心理学的戦略が吹聴され、それらが不可避に伴う矛盾やジレンマに直面せざるを得ない現代社会において、経済学や心理学ほど単独で「このゲームに勝つ」ために役に立つかどうかは定かではない。しかし、社会学は他の社会諸科学とともに「このゲームを知る」ためには不可欠の視点であり、ゲームを知る者は場合によってはゲームを有利にすることもできるし、ときにゲームのルールを変えていくことさえ期待できるからである。

### 付記

本稿は、2021年7月10日に開催された日本大学社会学会大会シンポジウム〈モダニティを再考する〉での報告「近代における恋愛的自己と家族—エヴァ・



イルーズの議論をめぐって」の原稿を元に、大幅に再構成したものである。コーディネーターをつとめた同僚の仲川秀樹氏を含め、議論に加わってくださったパネル、および、フロアの皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

### 注

- 1) モロッコ生まれ、パリで学士(社会学)・修士(コミュニケーション)、プリンストン大学で博士号(コミュニケーション)を取得、2022年現在はイスラエルのベツアルエル美術デザイン学院で女性初の学長を務める。研究関心は、感情社会学、文化社会学、資本主義論にまたがっており、資本主義が性と感情(愛)にもたらした影響についての研究を行っている。研究手法は、文学作品から批評、ネット上の記事、SNSの書き込みなどを縦横に用いて、実証的というよりも理論的な仕事を中心としている。従来は心理学の領域と考えられてきたこうした領域において、あえて社会学の意義や社会学的な分析の必要性を例証する書き口が目立つのも特徴である。
- 2) この点、松崎茂は、ウェーバーの行為類型に踏みとどまりながら、感情的行為が欠くとされる行為の形式を補完するために「感情指向的行為」という概念を提唱し、生成論やフロー理論を用いたユニークな論考を行っている。こうした試みは、感情的行為そのものではないが感情経験それ自体が目的合理的行為のターゲットとなる場面を扱う点で、ウェーバーの議論を掘り下げる興味深いものである(松崎 2015)。
- 3) 日本とのかかわりでいうと、イルーズは2018年3月に日仏会館および明治学院大学言語文化研究所主催のイベントで来日公演する予定だったが、残念ながら本人の病気のため中止となったようである。
- 4) 本書において、「愛love」の概念定義がじゅぶうんに整理された形で示されていないことは、読者の混乱の原因になってもある。たとえば、本書で取り上げられる愛は、基本的には男女間の性愛(エロス)の近代的派生を念頭に置いているが、強調したい側面に応じて、「恋愛的愛(romantic love)」、「性的愛(sexual love)」、「官能的愛(erotic love)」などと使い分けられている。これに対して、とりわけ5章では、前近代における神秘化・呪術化されたキリスト教的愛は、男女間の性愛(エロス)を中心としながら神の愛(アガペー)とも接続するものとして対比されている。
- 5) 欧米を席卷した恋愛指南書としてイルーズが何度も取り上げている心理学者ジョン・グレイの著書のうち『Mars and Venus on a Date』は、秋元康の訳

として『この人と結婚するために——恋の始まりからプロポーズまで相手の気持ちを離さない愛のルール』（2002年、三笠書房）というタイトルで出版されている。欧米で心理学者が果たしている役割を、日本では美少女タレントグループの大物プロデューサーが果たしている点は興味深い。

- 6) 大会シンポジウムでパネルから出た質問として、「親密性」というときに夫婦・カップル間の親密性と、親子間・ケア関係に付随する親密性をどう考えるのかというものがあつた。その場では、英語圏では、intimacyが主に夫婦間など横のダイアドについてしか用いられないことに触れて議論を切断したが、後になってみると、この点は親密性研究の日本への受容にとってかなり重要な問題提起なのではないかと考えるようになった。E・ショーターが感情革命の中で論じたように、夫婦間、母子間、家族集団の感情性はそれぞれ異なる性格を持っており、たとえば、夫婦間の性愛と、親子間の愛情もかなり性質が異なるものであるだけでなく、生存保障と慣れ親しみに基づく子から親への愛着（attachment）と、ケアと庇護に動員される親から子への愛情もかなり異質なものである。にもかかわらず、愛の分析的な議論の場でさえ「では親子は？」という疑問が出るほどに、こうした多彩な感情性を一体（あるいは家族集団の感情性を基底的なもの）と考える傾向があるとすれば、それが何に起因するのか／愛の議論にどのような影響を与えているのかは重要な問題であると考えられる。

#### イルーズの主要著作（出版年順）

- Illouz, Eva., 1997, *Consuming the Romantic Utopia: Love and the Cultural Contradictions of Capitalism*. Berkeley: University of California Press.
- Illouz, Eva., 2003, *Oprah Winfrey and the Glamour of Misery: An Essay on Popular Culture*. Columbia University Press.
- Illouz, Eva., 2007, *Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism*. Polity Press, London.
- Illouz, Eva., 2008, *Saving the Modern Soul: Therapy, Emotions, and the Culture of Self-Help*, The University of California Press.
- Illouz, Eva., 2012, *Why Love Hurts: A Sociological Explanation*, Polity.
- Illouz, Eva., 2014, *Hard Core Romance: Fifty Shades of Grey, Best Sellers and Society*, University of Chicago Press.
- Illouz, Eva., 2018, *Emotions as Commodities: How Commodities Became Authentic*.

Routledge.

Illouz, Eva., 2018, *Unloving: A Sociology of Negative Relations*. Oxford University Press.

Illouz, Eva., 2018, *Happycracy: How the Industry of Happiness controls our lives*. Polity Press.

Illouz, Eva., 2021, *The End of Love: A Sociology of Negative Relations*. Polity.

#### 参考文献 (abc順)

Ariès, Philippe., 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Editions du Seuil (=1980, 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャンレジーム期の子供と家族生活』みすず書房).

Badinter, Élisabeth., 1980, *L'Amour en plus*, (=1991, 鈴木晶訳『母性という神話』筑摩書房).

千葉和矢, 2011, 「〈書評〉『冷たい親密性』」『年報人間科学』32: 99-103.

Campbell, C., 1989, *The Romantic Ethic and the Spirit of Modern Consumerism*, Basil Blackwell, Oxford.

Hochschild, A., Russell., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press (=2000, 石川 准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社).

松崎 茂, 2015, 「感情的行為から感情志向的行為へ——イグナチオ・デ・ロヨラにみる溶解体験を参考にして」『社会学論叢』184: 1-21.

落合恵美子, 2015, 「つまずきの石としての1980年代——『半圧縮近代』日本の困難」瀧井 一博編『失われた20年と日本研究のこれから・失われた20年と日本社会の変容』国際日本文化研究センター: 171-182.

岡原正幸, 1987, 「感情経験の社会的理解」『社会学評論』38 (3): 321-335.

岡原正幸, 1994, 「感情社会学の主題系——古典からMaxWeber」『哲学』(96): 77-111.

岡原正幸, 1998, 『ホモ・アフェクトス』世界思想社.

岡原正幸. 2013, 『感情資本主義に生まれて』慶応大学教養研究センター選書.

Parsons, T. et al., 1955, *Family: Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kegan Paul. (= [1970] 2001, 橋爪貞雄ほか訳『家族』黎明書房.)

Rose, Nikolas, 1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, London (2nd ed.): Free Association Books (=2016, 堀内進之介・神代健彦訳『魂を統治

- する——私的な自己の形成』以文社).
- 崎山治男, 2005, 『「心の時代」と自己——感情社会学の視座』勁草書房.
- 澤井唯人, 2013, 「感情的な身体——感情的行為論の礎石」『現代社会学理論研究』7(0): 41-53.
- Shorter, Edward., 1975, *The Making of the Modern Family*, Basic Books (=1987,  
田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道 潤『近代家族の形成』昭和堂).
- 谷本奈穂・渡邊大輔, 2019, 「ロマンティック・ラブ・イデオロギーとロマン  
ティック・マリッジ・イデオロギー——変容と誕生」小林盾・川端健嗣編  
『変貌する恋愛と結婚——データで読む平成』新曜社: pp48-70.
- 高橋勅徳, 2011, 『婚活戦略——商品化する男女と市場の力学』中央経済社.
- Weber, M., 1921, *Soziologische Grundbegriffe*, Tübingen (=1987, 阿閉吉男・内藤  
莞爾訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣.)
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドクス』新曜社.
- 山田昌弘, 2019, 『結婚不要社会』朝日新書.
- 山田陽子, 2007, 『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像——「心」  
の聖化とマネジメント』学文社.
- 山田陽子, 2019 『働く人のための感情資本論——パワハラ・メンタルヘルス・  
ライフハックの社会学』青土社.